会員のひろば

古きをたずねて（日本史と古川柳）

美唄歯科医師会会員　雨田　実

日本史を題にした古川柳は，題材そのものが良く知られているので，わかり易く親しみ易い句が多い。正確な史実によるものもあり，伝説そのままのものもあり，歴史に託して何か言おうとしている諷刺らしい句もある。以下太古から近世までの目ぼしい句を拾って，幾つかご紹介したい。古川柳の真髄は自ずと看取することができる。

「二人にてあほ海原に竿を入れ」句はイザナギ，イザナミなる，男，女の神が，天の浮橋に立ち，天の瓊鉾を大海原にさし入れ，おのころ島を探り得られたことを述べ，古事記，日本書紀にもある有名な伝説に取材している。日本の国土建設はここから始まり，象徴的に描かれた日本歴史の第一頁である。そのことは侵略や征服ではなくて，埋立や干拓による国土の開拓であったことの証明である。

江戸時代にも役人は農家の申告など信頼せずに青田に竿を入れて実測し収穫高を予測した。これを検見といい，役人は二人で来て青田に竿入れをしている。それを百姓は指をくわえて見ているともとれる。表面は歴史句でも，かくれた意味がある。作者は百姓の気持ちをほのかに伝えているという句である。

「余ったを不足へ足して人は出来」古事記に「吾が身の成り余れる所をもちて，汝が身の成り合わざる所に，刺しふさぎ，国を生み成さんと思ふ」とある。この箇所は国語読本にもよく出ていて，教師はさして深く教えなくても，学生はすでにその意味をよく理解している。森厳無比の国造りも，凡俗がやれば人造りになってしまうという可笑しみは古川柳ならではの感が深い。

「神代にも，だます工面は酒がいり」八岐の大蛇の計略をいうのであるが，これも「も」とあるから他にもあることを暗示している。大江山の酒呑童子以下酒でだまされた例は後世数え切れない，現代の役人や政治家の汚職も大部分は酒である。

「猿田彦いっぱし神の気であるき」ニニギの尊が高千穂の峰に，お降りになった時，猿田彦が道案内をつとめた。後世祭礼の露払いとなってミコシの先に立って一本歯の高足駄をはき，天狗の面をかぶって，ひとかどの神になりすました気で歩いたであろうというもの。

「孝霊五年あれを見ろあれを見ろ」第７代孝霊天皇の御代に富士山が出現した。日本一の富士山が，一夜の中に飛び出し，それを埋め合わせるかのように，近江一国が殆どなくなり琵琶湖となったといわれる。この天変地変は，記，紀に出ていないが，江戸人は「和漢三才図会」などで承知していたらしい。道歯会の先生がたは昭和19年洞爺湖畔に昭和新山が一夜ではなかったが半年ばかりの間に出現したのはすべてご

存知であるが当時は戦時中のため報道は禁止されたというが，その時も「あれを見ろ，あれを見ろ」と，その騒ぎも定めし大きかったであろう。

「道鏡はほんの男の玉のこし」第46代孝謙天皇は女帝であったが，河内の国弓削の僧道鏡を禅師として宮中に迎え重用され太政大臣に登用され法王とも呼ばれすべて天子と異なるところがなく，皇婿の如く扱われついにこれに皇位を譲ろうとされたが，和気清麿呂の阻止で果たせなかった。句は一介の僧が皇婿の栄位にまで進んだことを，女ならさしずめ玉のこしに乗ったともいうことだとしている。このような怪僧のため道鏡は稀代の雄根者であったとの俗説をも生じ，川柳では道鏡といえば，はやそのことと決めてかかり，公表致しかねるような句がじつにたくさん残されている。

「清盛の医者は，はだかで脈をとり」平家の棟梁平清盛も養和元年64歳で病死した。これは火の病といって五体が熱鉄のように高熱を発したために医者をはじめ皆が裸で看護したというもの。

「雨やどりまでは武骨な男なり」太田道灌が，たか狩りの折りの山吹の花の故事を詠んだもので，武骨いっぽうの武将が雨具を所望したのに山吹のひと枝を出されて道灌は，「おおたわけ，これが雨具か，やい女」？と，どなったであろうと川柳子はいっているが，道灌が歌道に志したのは山吹の花で乙女に一本取られてから奮起したからと伝えられ，この優美な伝説は道灌の名を不朽なものとしたという。

川柳は俳句より程度の低いものと思われやすいけれど，盆踊りを詠んだ古川柳に「月になげ草にすてたる，おどりの手」と「松島や，ああ松島や，松島や」と比べた時，俳聖の顔色なしといえないでもないと思うのだが？近く読んだものに「五衛門は，なまにえの時いっ首詠み」というのがあるが，フィクションでも面白いので書き添える。熱い釜の中で吾が子を両手で持ち上げ「石川や浜眞砂はつきるとも世に盗人の種はつきまじ」などという，いとまもないであろうが，五衛門ならいいそうに思えるから面白い。その後，子供を釜の中で死なせたあとで，五衛門が，最後に人の名を呼んだことは意外と伝えられていない。「お母さん」ではなく女性，しかも外人の女性の名前であったという。皆様の良くご存知の名前であります。「イマニエル」これで一件落着。

俳句を川柳になおすと，「古池のそばで，芭蕉はビックリする」芭蕉は飛び込み，道風はとび上がり。となって興ざめするが「タイム・イズ・マネー」を時は金なりと訳しては，まるで面白くもなんともないが，一寸の光陰怪ろんずべからずと，訳せば不朽の翻訳といえるような気がする。漢詩の翻訳にも流石と思えるようなものが幾つかあるので，次回にゆずりたい。乞うご期待と言っては言いすぎかもしれない。可々。